多摩大アジアダイナミズム研修視察　感想文

多摩大学　経営情報学部 3 年
高田　一

韓国視察研修を通して近年見られる著しい韓国の経済的発展の模様、また歴史や文化的な体験について身を持って学ぶことができた。韓国到着の際には空港からの町並みや道路などのインフラの整備もされており、ビルなどの建設ラッシュの光景が見受けられた。韓国を代表する現代自動車、KIA 自動車の車が 9 割近い割合で走行しているのも目にした。歴史・文化体験として景福宮（朝鮮王宮）と 38 度線の統一展望台の見学を行った。景福宮では朝鮮王朝時代の建物から当時どのような生活様式であったのかが伺えるような見学であった。統一展望台では韓国と北朝鮮の非武装地帯の最前線が見ることができた。終戦ではなく「休戦」が続いている状況下での最前線ということで緊張の面持ちであった。韓国側から見た北朝鮮は漢河をまたいで見ることができ、北朝鮮側の川沿いでは「モデル村」というものが展開されていた。この村は韓国側に対して北側の発展の様子をアピールするためのものであるが、その背景には苦しい北朝鮮の状況があり、色々と考えさせられるものがあった。

研修のメインは、韓国国会議事堂と韓国三井物産の視察訪問であった。韓国国会議事堂ではパク・ウンス議員の貴重な講演を聞くことができた。パク議員は韓国初のハンディキャップを持った議員であり、講演ではパク議員のこれまでの活動経緯について話を聞くことができた。韓国政治の中での障碍者政策の位置づけ、そのための法律や制度を勉強し、韓国でも障碍者が優遇される国になりつつあることが伺えた。ビジネスの勉強の面では韓国三井物産に訪れた。この訪問では「商社は何をしている会社？」という問いについて、現在三井物産では貿易以外にも電力・水・交通・エネルギー基礎産業などのインフラ事業の他、再生エネルギーやプロジェクト開発についての事業を行っている。人材に関する話題の中では、「グローバル人材」について、韓国三井物産で働いている人のほとんどが韓国の方であり、さらに韓国語以外に英語や日本語が堪能な人材がそろっていた。社内での公用語が日本語であることから皆日本語が違和感なく使用されていた。ビジネスの最先端の場所に立つ韓国三井物産の建物からはソウル市内が一望でき韓国においてもこの場所が最前線であることが身を持ってわかった。

この韓国視察研修を通して発展を遂げる韓国の雰囲気を味わうと同時に韓国におけるさまざまな最先端に立つという大変貴重な体験ができたことは今後の自分にとって大きな利益になった。

多摩大学　情報学部３年
渋谷裕佳

２０１１年9月１３日から１５日にかけて、多摩大学韓国視察に趙ゼミの一員として参加した。私にとってはこれが初めての海外への渡航であったので、行く前から、外国の地に足を踏み入れその文化に触れることに対しての興味があり、楽しみにしていた。さらに、韓国の国会議事堂や韓国三井物産の訪問など、普通の旅行ではなかなか体験できないことを行えることを考えると、更に期待感が増していった。

９月１３日、日本を発ち韓国に到着すると、住宅やビルなどの建造物、街並みの雰囲気は日本と同じような感じであったが、文字言語はハングルであるため不思議な感じがした。３日間の行程の大半を過ごした明洞は、街中のオフィス街は大手町、多くの人でにぎわっていた明洞通りは渋谷のような雰囲気で楽しめたが、オフィス街の傍らに景福宮があり、街と調和しながらも独特な雰囲気を醸し出しており、歴史を重んじる風土が伝わってきた。実際に景福宮を見学してみて、敷地の広大さ、門や建物の豪華さから朝鮮王朝の規模の大きさが垣間見れた。テレビや本などで歴史を学ぶのもいいが、実際に歴史が動いた場所に訪れ、空気や世界観を感じることがやはり大切なのだと感じた。

２日目に韓国国会議事堂を訪れた際には、見学のほかにパク・ウンス国会議員の講演を拝聴し、障害者であるパク議員の努力もあり、韓国は障害者への社会的自立に対する支援が厚く、企業や政党などの団体の受け入れ態勢が整っていることを知り、雇用の支援の面では日本よりも進んでいると感じた。しかし、親日家であるパク議員が日本を訪れた際に触れた障害者の方へのサービスを韓国でも取り入れたいと言ってくださったのには、日本人としてとても嬉しかった。韓国では反日教育がおこなわれているため、日本にあまり良くないイメージを持っている人が多いかもしれないが、パク議員のように親日家で、日本の良さを尊重してくれる人が増えてほしいと感じた。

３日目は韓国三井物産の本社を訪れ、商社というものがどういう存在なのか、そしてグローバル化する社会での企業の在り方について学ぶことができた。講演を通じて、日本発の企業である三井物産が海外で成功しているのは、社員への徹底した研修や、様々な事業を行い人々の生活に入り込んでいるという背景があるのだと感じた。また、日本本店の新卒採用を海外で実施したり、海外の支店の社員を日本本店に赴任させたり、日本本店の社員を海外に赴任させる動きが活発になっていて、世界から優秀な人材を取り入れる方針であるということを知り、これから就職活動を控えている身としては、言語や海外事情について学び、ある程度グローバル化に対応できる人間となり、企業のニーズにこたえることができるようになりたいと感じた。三井物産では、韓国の学生の方が日本の学生よりも優秀であると聞き、なおさらそう感じた。講演後、社内での実際の仕事の様子も拝見させていただいたが、社員の方はみな熱心に仕事をしていて、優秀そうな感じが伝わってきた。

私も社会人になった際には自分の仕事に責任を持って取り組んでいきたいと感じた。

３日間を通して、歴史・政治・企業の３つの面から韓国という国について深く学ぶことが出来たと思う。パク議員の講演での「韓国は援助される国からする国になった」と言う言葉は、韓国の成長を端的にあらわしている言葉であると感じた。サムスン電子などの世界的な大企業も出てきており、今後ますます日本を含めた世界との交流が盛んになってくるだろう。そうした時に韓国のことをもっと知っておけるように、韓国についてより勉強して行きたい。

多摩大学　経営情報学部３年
田邉大輔

私が今回アジアダイナズム韓国視察に参加した理由は、国会議員との懇談・韓国三井物産を視察するといった貴重な体験を目的として、参加した。去年の８月の下旬にゼミで中国に４泊５日で行ってきて、中国と日本の違いや良さ、悪さを考え、大きく物事を考える習性がついた。だから、今回の韓国視察も、貴重な体験はもちろんのこと、韓国と日本の違いや発見を見つけられたらよいという心構えで行った。

まず、朴議員と国会議事堂で懇談した。朴議員とは、足が不自由な方（いわゆる障害者）であり、社会の不当な扱いに幾度となくぶつかり、戦ってきた人物である。その理由は、後輩にも障害者がいるので、道をあける目的もあった。自身の努力の甲斐あって、判事になり、弁護士、２００２年から政治活動をし始める。朴議員は、日本の障害者支援活動を研究し、それを韓国で応用してきた。ボランティアをつのり、障害者の方を目的地まで連れて行く大阪の運動を大邱でやったり、車いすを自分で動かしてテニスをする大会を開催したりした。すると、韓国国内が変わってきた。盧 武鉉大統領は朴議員の要請である、障害者差別禁止法を採択した。内容は、障害者公務員を全体の２％から３％にすること。大企業に一定の数の障害者を必ず雇用すること。これは２００７年から施行され、１３００人から２０１０年には、９０００人の公務員に増え、小学校の職員にも適用されるようになった。昔だったら考えられないことであり、それを社会に根づかせるのは長い時間と努力が必要だと感じた。朴議員は、武器で片足を失った少年の少年を見せながら、日韓関係においては、その武器を輸出するライバル同士ではなく、障害者のためになるハイテク機具を輸出し合うような、真のよいライバル同士に将来なってほしいと言った。議員の生の声がひしひしと感じられた。既存の社会に、新しい制度を入れるというのは、並大抵ではない事、ビジョンを先に設定し、それに向けて行動すべきことを改めて認識することができた。

３８度線とは、韓国・北朝鮮の休戦停止ラインの事である。１９５３年から両国は休戦

状態に入り、３８度線を境に領土を分けている。ここに行くまで私は現地の女性のガイドさんの話を聞き、ある意味衝撃を受けた。南北問題においての自分なりの見解、自身の政治的見方スタンス、これからの日韓関係のおいての展望を、訥々と語りだしたである。そして、日本植民地時代の事についても見解を語りだした。もし、私が逆の立場だったら、勇気がなくて、そのような歴史や見解を語りだせないと思い、すごいことと思った。３８度線につくと、離散家族の写真や石碑を見て、ガイドさんが感極まっていた。話の例に、拉致被害者である横田めぐみさんの話をし、親御さんの気持ちで３８度線を見てほしいと言われたのを思い出して、私も感極まった。３８度線とは、決して他人ごとではなく、自分たちも問題認識をしなければ、アジア・グローバル人材にはなれないと感じた。北朝鮮は、山と田園が広がっていた。望遠鏡で見ると、ガラスのない家や建物が見えたりしたが、人がいてもおかしくない時間帯なのに、人は見えなかった。いったいこの時間に何をしているのだろうかと感じた。北朝鮮のパネルに蓮池さんが、北朝鮮の学生に日本語を教えている写真があった。横田さん、蓮池さん、拉致問題・南北分断…ここではまだ冷戦の傷跡が未だに人を苦しめていると思ったと同時に、私達日本人がすべきことがあるのではないだろうかと感じた。

多摩大学　経営情報学部２年
村杉契祐

今回の視察は、日本では感じることのできない韓国の実情を知るために参加した。結果、韓国と日本の歴史的な事象を含めた問題について考える機会を持てたと思う。まず初日に行った場所で日本と韓国の歴史観の違いを感じた。最初に感じたのは世宗路にある李舜臣の像を見た時だ。その時先生の説明であったが、李舜臣は豊臣秀吉の朝鮮出兵のおり、亀甲船で日本軍を退け韓国で英雄視されている。日本での李舜臣は、豊臣秀吉の朝鮮出兵を阻止した人物という位置づけで学校でも深く学ばなかった気がする。景福宮に行った時も複雑な日韓の歴史問題を感じた。景福宮には以前、日本の植民地時代に立てられた朝鮮総督府があったという経緯があり、韓国と日本の複雑な事情を感じた。他にも、乙未事変で閔妃（ミンピ）が殺害された現場を見学したときにも感じることができた。閔妃殺害現場で韓国人のツアー客がなにか説明されていた。後で先生の説明でわかったが、閔妃殺害の説明を熱くしていて国民感情の原因を垣間見た気がする。このように日本と韓国では歴史の経過が違うので韓国で反日感情が存在するのも頷ける。というのも以前新聞で韓国の中高生の 34%が日本を主敵と考えているという結果が出た記事があり、その理由を感じることができた。この体験は日韓でビジネスをする上で必要な事柄であると共に、国際社会で働く場合には必要な感性なのではないかと考える。

次に三井物産に行ったときにも国際社会で働くときに必要な事を学んだ。三井物産の社員教育の話になった時、新入社員の基本研修の内容を聞いたが、英語、基本用語、財務会計、企業会計と今自分が勉強していることと似ていたのでより一層やる気が出た。だが一番感銘をうけたのは、こういう人材が欲しいというテーマで行われた人事部の鈴木さんの話だった。鈴木さんは、「正直なこと」、「よく考えること」、「どこかとんがってること」という３つをあげていた。そして、「何もしないでチャレンジしないことはいけない」とも言っていた。これは国際社会で働く場合に必要なことであると共に、日本でも同じことが言えることだと思う。

最初に書いた歴史に関する問題は、国際社会で働くとき必要なことで、国が違うということは、文化や歴史も違うということなので、そこは肝に銘じておく必要がある。だが、こういう問題を除けば、三井物産で感じた基本的な部分の大切さは万国共通であり、韓国で学んだ一番大きな事なのかもしれない。だから、私たちは真摯さと国際社会に対する理解を持つことが必要になってくるのではないだろうか。

多摩大学　経営情報学部３年
綱川貴裕

自分は今回初めて韓国に行ってみて大変楽しかった。いま日本では韓国ブームがありテレビでも韓国特集やK-POPの歌手が頻繁に出ており、身近に触れることが多かったので実際に行ってみて、とてもよかった。特に韓国三井物産の方の講演を聴けたのは自分にとって大変有益であった。その講演の中で、会社に同じ人が居ても意味がなく、それぞれ個性を持った人が集まることによって会社は駄目にならず、発展していくと言っていたが、今後の就職活動においてヒントになった。すなわち、みんなと同じことをアピールしても意味はなく、優れた個性をアピール出来れば志のある人事の人ならば注目されるのではと素朴ながら改めて思った。

他にも、日本人は草食系といわれ控えめだが、韓国人は肉食系であり攻撃的なところがあるところは、日本人として危機感を持たないといけないと刺激を受けた。それは日本の企業がアジアの人材を多く採用しつつあることとも関係があると思った。それこそ、日本企業が一部の分野で韓国企業に押されている原因でもあるといえよう。

このように現地に行ってみないと分からないことはたくさんあり、初めて知ることも多くあったので、韓国視察に参加することが出来てとてもよかったし、貴重な体験になった。

以上